

令和8年1月16日（金）令和7年度富山県成長戦略会議 議事要旨

<開催概要>

- 1 開催日時 令和8年1月16日（金）10：00～12：00
- 2 開催場所 富山県民会館3階ギャラリーC301、オンライン
- 3 出席者（五十音順）

朝比奈 一郎	青山社中株式会社筆頭代表CEO
安宅 和人	慶應義塾大学環境情報学部教授 LINE ヤフー株式会社シニアストラテジスト
齋藤 滋	富山大学学長
高木 新平	株式会社ニューピース代表取締役CEO
土肥 恵里奈	株式会社ママスキー代表
中尾 哲雄	富山経済同友会特別顧問
中村 利江	エムスリーソリューションズ株式会社代表取締役会長
藤井 宏一郎	マカイラ株式会社代表取締役CEO
藤野 英人	レオス・キャピタルワークス株式会社 代表取締役社長CIO
前田 大介	株式会社MAE 代表取締役社長
藻谷 浩介	株式会社日本総合研究所主席研究員

<議事次第>

- 1 開会
- 2 挨拶
富山県知事 新田 八朗
- 3 議事
 - (1) 新たな総合計画の決定について
 - (2) 「幸せ人口1000万実現会議」への改編について
 - (3) 富山県成長戦略の成果について

1 開会

2 知事挨拶

- ・ 昨年(2019)の12月に富山県の新しい総合計画「富山県総合計画-幸せ人口1000万～ウェルビーイング先進地域、富山を目指して～」を策定した。約11ヶ月間にわたり議論をして策定したもの。総合計画審議会から私に諮問をするという形で策定したが、その審議会には、この成長戦略会議の委員でもある齋藤委員、藤野委員、そして前田副座長にも参画いただいた。
- ・ この策定過程で、15市町村を私が草案を持って回る「未来共創セッション」を開催したが、そこには高木委員、中村委員にもキーノートスピーチをいただくなど、委員の皆様に多大なご協力をいただいた。この場を借りて改めてお礼を申し上げる。
- ・ この新たな総合計画は、まさにこの富山県成長戦略会議で委員の皆様と共に考え、ともに実行に移してきた富山県成長戦略のビジョン「幸せ人口1000万～ウェルビーイング先進地域、富山～」を、基本理念として継承することになった。私の知事就任後、皆様に突き抜けた議論をいただき、なかなか行政主導では生まれないような画期的な富山県の成長戦略に基づく取り組みは、着実に今、実行の局面に入ったということ。今後は、成長戦略のビジョンを継承した新たな総合計画のもとで、具体的な取り組みを加速させていきたい。
- ・ 新年度からは、この富山県成長戦略会議を「幸せ人口1000万実現会議」と名前を改め、現行の成長戦略の枠組みだけにとらわれることなく、県政の重点分野の方向性についても幅広くご意見をいただけるような場へと進化させていきたいと考えている。
- ・ 本日は、新たな総合計画の概要、そして富山県成長戦略に基づき皆様とともに取り組んできたその成果の一端を報告し、今後の取り組みの方向性のほか、この会議で今後議論すべき事項などについても意見交換をさせていただきたい。着実に進化をしてはいるが、この会議は引き続き、忌憚のないご意見をいただける場であり続けたいと思うので、どうかよろしくお願いしたい。

3 議事

- (1) 新たな総合計画の決定について
(事務局より資料1に基づき説明)
- (2) 「幸せ人口1000万実現会議」への改編について
(事務局より資料2に基づき説明)
- (3) 富山県成長戦略の成果について
(事務局より資料3に基づき説明)

【藤井副座長】

- ・ 最初に、総合計画審議会会長職務代理者として新たな総合計画の策定に関わられた齋藤

委員から、成長戦略会議を継承して新たに策定された総合計画への期待をお願いしたい。

【齋藤委員】

- ・ 県の総合計画というのは、通常は県職員が中心となって計画を立てるものだが、今回は県内から色々な職種の方に集まっていただき、本当に「総合知」というか、皆さんで考えた、県民で考えたというところに大きな意義があると思っている。
- ・ この成長戦略会議が始まった時にウェルビーイングを採り上げた。当初はあまり馴染みがないということで、結構不評だった。しかし、今回の総合計画策定にあたっては、県民の方々が、やはりウェルビーイングを富山の旗印にしていきたい、健康だけでなく社会的にも非常に健康で住みやすい街にしたいということで、10年後はそういうまちづくりをしたいということが中心になった。
- ・ 人口減少は致し方ないが、その中で人口減少を食い止めるだけでなく、関係人口を増やそうと「幸せ人口 1000 万」を目指して、日本人や海外の方も含めて、富山に関わりを持っていただき、そこで様々な形でのウェルビーイングを享受してもらいたいという話を進めてきた。人口減少の中でのグローバリゼーション、海外からの移住や観光客についても議論され、一部では海外の方を排除するような動きもあるが、富山ではウェルビーイングという形で、広く海外の方々の文化も尊重して、一緒に仲良く住みやすい街にしていきたいという結論になった。
- ・ 色々な重点分野があるが、私が非常に良かったと思うのは「未来に向けた人づくり」。子供、教育面、そして色々な文化・スポーツやスタートアップ企業も含めて、色々な人づくりを富山県で中心として進めていこうという内容。経済も非常に重要なので、そのための人たちが中心となって新しい経済システムをきっちり構築し、住みやすい環境だけでなく経済的にも豊かな街にしていきたいという提言を作ることができた。本当に県民の皆様方の意見が直接反映された、素晴らしい計画になったと思っている。10年後、行政だけではなく県民も含めて、こうした未来の富山県を創造したいと考えている。

【藤井副座長】

- ・ 次に成長戦略の各プロジェクトチームの座長から、これまでの成果及び今後の取り組みの方向性に対する助言などをお願いする。

【中村委員】

- ・ ウェルビーイングで一番分かりやすい指標としては、認知度。先ほど齋藤委員からもお話いただいたが、「ウェルビーイング」という言葉を富山県民は知らなかった。「なんやそれ」みたいな形で始まって、当初は 15%しか認知度がなかったが、なんとこの数年で

51%まで向上した。「すごいよね」と言っている一方で、まだ半分の人しかご存知ないということ。まだまだ認知させていく必要があると思っている。しかし、この51%になった成長性と富山県独自の指標として花の形を作ることなどは、他県がやっていなかったのもので、総務省からも表彰をされるなど、非常にとんがった政策として認められてきたのではないかと思います。

- ・ここまで来たので、引き続き認知度を51%からもっと高めて、ほとんどの県民が知っている、そして実際に自分事としてアクションしていただくことが必要。ウェルビーイングの定義を知っていただいた上で、「富山県はそういうことを目指しているんだから、自分もそれに乗っかろう」というアクションをしてもらうことが重要。
- ・総合計画策定の中で、高岡市の未来共創セッションに参加したが、本当に県民の方の中で自分事として取り組み始めている方が非常に多いと感じた。参加者の中には農業の方や教育現場の方、主婦の方などいろんな職種の方がいらっしゃって、富山県はとてもいいベースを持っているので、これをウェルビーイングを通じて良くしたいという考えなど、いろんなアイデアを出されていた。まさに県民の皆様から意見をいただきながら、県民のために計画を策定していくという良い進め方だと思った。

【高木委員】

- ・「寿司といえば、富山」ということで、ブランディング推進本部を約3年前に設置して取り組みを進めてきた。最初の3年間は、とにかくまず県内を盛り上げることと、作り手を増やす、職人や生産者を含めて、その層を厚くしようということを進めてきた。
- ・まず、「寿司」という世の中のホットワードを使い、富山の強みを生かして輪を広げていく、関係人口のその先を広げていくということ。ホットなところだと、去年、富山市の寿司の消費額が全国1位になって、少しずつ富山が寿司でブランディングをやっているということが報道されたり注目されている。
- ・新田知事が北九州市長と「すし会談」を開催し、JR西日本と連携協定を進めて、すしのゴールデンルートを作ろうという取り組みをやっている。「すし外交」というか、寿司を掲げることで他の地域と連携して、JRなどを巻き込んだ動きができていることは良いと思っている。
- ・「寿司といえば、富山」ロゴマークを使って、民間事業者の方々にいろんな取り組みをしてもらうのも、約100件申請をいただいているので、旗印として民間事業者や県民の皆さんと一緒に輪を広げていくことが着実にできてきていると感じている。
- ・作り手の部分は、東京寿司アカデミーさんと一緒に「北陸寿司アカデミー」というものを構想してきて、今年度中に開講できる。ちゃんと人も集まっているので、10年構想の最初の3年として、着実に輪を広げることができたと思う。

【朝比奈委員】

- ・県庁オープン化について、私の解釈も入るが、2つの意味があると思っている。1つは県民や対外的にオープンという意味。もう1つが、県庁の中の縦割りと各部署の風通しという意味でのオープンというダブルミーニング。そういう中で、対外的には中途採用の人数、割合などの数値をメルクマールとして出したりしながら、他の人の知恵をどんどん入れていく。まさにこの会議が体現しているような形で外の知恵を入れていくところをやらせていただいた。数値目標もあるが、定性的にも「しあわせる。富山」などの機会を発信を強めていったりしながら、県民の方の理解も得ていく必要もある。先ほど、中村委員や高木委員からお話があったが、まさにそうした動きそのものが県庁のオープン化に資した動きであって、感謝申し上げる。
- ・対内的なオープンの方も含めて、庁内の副業制度などは一番の典型。自分の仕事の領分を超えて、他の仕事もやっていくという職員への普及啓発もかなり推進してきているように見えるし、実際に成果も上がっている。「人材育成確保方針」をしっかりと定め、それを体現させるための会議も立ち上がっているところ。県庁職員一人一人が始動していく「始動（しどう）」というキャッチフレーズも新田知事のご真筆で決まり、徐々に県庁職員への浸透を図っている。
- ・デジタルの活用も、藤井座長時代に路線ができて、かなり活用が進んできている。「デジタルケイパビリティインデックス」のデジタル公共サービスのスコアについては、全国でもいい成績を出しているということで、人的側面、デジタル側面の両面を通じて、マトリックス的に言うと全象限にわたってオープン化を地道に進めているところ。
- ・今まではどちらかというと新しい政策を打ち上げていく時期で、ともすると職員や県民の皆様においては若干戸惑われる部分もあったかと思うが、今度はそういうものをどんどん固めていく時期なので、まさにこの会議が「成長戦略会議」から「幸せ人口1000万実現会議」に衣替えしていくのと時を合わせて、打ち上げ時期から体制固めという時期に来ていると思っている。
- ・職員の理解、例えば中途で入ってきた方々がちゃんと定着していただくとか、新しい人材育成確保方針の中で自分の成長が見えるように、タレントマネジメントシステム（カオナビ）を入れて定着を図る。打ち上げるだけではなくて、しっかりと固めるというところで今後進んでいくのかなと思っている。

【藤野委員】

- ・スタートアップについて、いくつかの成果がある。まず「T-Startup」は、ロールモデルが13社出てきていて、着実に富山の中でスタートアップ企業が認められ、定着していくことができたと思っている。
- ・その中で特に重要視しているのが「スタートアップエコシステム」を作るところ。スタートアップというのは起業家だけでできるものではない。起業家を支える様々

なインフラ、例えばエンジェル投資家、先輩起業家、金融機関、弁護士、公認会計士、税理士、それから地域の企業、大企業でスタートアップが好きな人などが必要。日本全体、特に東京でも 2000 年段階ではそのエコシステムがほぼできなかった。20 年かけて東京の中に分厚いエコシステムができたことで、スタートアップ企業がどんどん出て行き、支える仕組みができています。

- ・富山県はそれを作る最中なので、アントレプレナー（起業家）だけではなくて支える人が重要であり、サポーター企業を増やすことに近年力を入れて、83 社に協力いただいている。このサポーター企業の層を様々な形で分厚くしたい。県内の先輩企業たちに対しても、スタートアップに対する関心を高めていただきたいと思っている。
- ・もう一つの成果は、大学発スタートアップの数の成長率で日本一になったという非常に明るいニュースがある。少し個人的な話になるが、国のスタートアップ政策推進分科会の委員になった。次の 6 月に出す「骨太の方針」のスタートアップ分野に打ち込みをしていく。そこには 3 つのテーマがあり、1 つはスタートアップの資金循環、2 つ目はディープテック（核融合や AI、バイオベンチャーなど）、3 番目には「ローカルスタートアップ」という大きなテーマ。私がこのプロジェクトに呼ばれたのは、1 番目の資金循環と 3 番目のローカルスタートアップの分野で富山県での活動も評価されたのかなと思っている。富山県の事例もフィードバックしつつ、逆に国からの議論の成果も富山県にフィードバックできるようにしていきたい。これはおそらく富山県のスタートアップ政策が、国にも噂が届いてきたということではないかなと思っている。

【藤井副座長】

- ・新産業分野について、サーキュラーエコノミーを推進しているが、その心は、富山県はやはり製造業で稼ぐ県だということ。クリエイティブ産業や IT はこれから厚くしていかなければいけないが、富山県は製造業の県であるということは欠かせないアイデンティティであり、実態。しかし、その製造業自体がどんどん変わっている。特に私たちが注目して、なおかつ危機感を抱いていたのが、サプライチェーンが国際的に変わってきていること。これまで、富山の中小製造業の皆様が頼ってきたサプライチェーンが分散化していくだろうし、今までのように元請けに頼っていくのでは、産業立県としてやっていけない。
- ・その際に世の中にどういう動きがあるかというと、カーボンニュートラルや SDGs などの潮流がある。そういうところに乗っかっていけない製造業の会社は、下請けを外されていくというサプライチェーン改革が、外国企業、日本の大企業を含めて両方ともある。そこで外されずに逆に選ばれていくためにはどうなっていくべきかというところが、根本的な考え方。
- ・その際に主な柱として掲げたが、グリーントランスフォーメーション（GX）。それからサーキュラーエコノミー、DX、データサイエンス。グリーンとサーキュラーは分かるに

しても、なぜそこに DX が絡んでくるかという、単に IT により効率化したいということではなく、サプライチェーンのマネジメントをちゃんとやる際に、きちんとそれがカーボンニュートラルであるとか、SDGs の基準に合致しているとか、非財務情報の開示の準備ができているということが必要。データをちゃんと社内でトラッキングできていること、なおかつそれを社会に共有できることが重要になっている。モニタリングとオーディットとトレーサビリティなど。

- ・ここは DX の知見がないと絶対できない。グリーンとサーキュラーにトランスフォームしていくには絶対 DX が必要だという意味で、DX がかなり強めに打ち込まれている。ここの政策に関しては、アルミがもともと県内の強みで突出しているので、重点分野に設定して全国に先駆けた先行事例を作ったり、サーキュラーエコノミーに関しては、いろいろな素材をリサイクル、アップサイクルして別の形態に利用するなど、業界間の連携が必要になってくる。これまで、業種連携のネットプラットフォームを作ったり、静脈産業と動脈産業の連携といった一社にとどまらない連携基盤づくりを進めてきたところ。
- ・そのほか、今のところ製造業における付加価値は、実は富山県は 34.3% で全国 14 位。県内総生産の県民一人当たりの年間成長も成果が上がってきているので、引き続き頑張りたい。
- ・このほか委員の皆様から、今の話以外にも、報告事項へのご意見や、現段階で来年度こんなことを重点分野として議論すべきと考えるもの。来年これを重点分野としてやるべきことなどがあれば、ぜひご意見を自由闊達にいただければと思う。ここ最近の県内外の情勢、国際情勢も突発的に荒れていたり、色々あったりするので、前回までで十分議論しきれなかった部分や国政を反映して今、県でこういうことを考えなければいけないという話があれば、お願いしたい。

【齋藤委員】

- ・先日、文部科学省で高等教育局長と面談した中で、地方大学が県と協力して、県の成長戦略に十分コントリビューション（貢献）するということと、小中高、高校生の教育現場にも出向いて行って、地方大学が中心となって地方の教育レベルを上げるということをお話した。
- ・はっきり言われたのは、あまりにも早く文系、理系を分かれさせてしまうので、やっぱりもっと理系人材を増やしてほしい、それから文理融合という形の人材を大学が中心になって育ててほしいと言われた。そういった活動によって、富山県全体の教育レベルを上げて、そういう人材が本当に県内の DX に貢献していく姿にしていきたい。
- ・ちょうど 1 月 31 日に富山大学で「とやま探究フォーラム」を実施する。従来は高校生だけだったが、今年は小学校、中学校も対象としている。スーパーサイエンスハイスク

ールや DX ハイスクールの高校 17 校を含め、県内 34 の高校が参加し、今回初めて、小学校、中学校、それから高校生が一堂に集まり、探究、情報、それからデータサイエンスの会議を行う。この事業は、非常に文部科学省からも視察に来られるなど注目されており、富山が最先端のことを行っている事例としていきたい。

- ・ 大学は大学生の教育だけを行うのではなく、小中高の教育にも協力し、地域の教育レベルを上げることに取り組んでいくと、将来の富山県は非常に明るくなると考えている。教育はめちゃくちゃ重要なので、若い世代の教育力を上げていって、それを元に富山の経済発展に努めていきたい。

【安宅委員】

- ・ 富山は「何をやる」というよりも、「どう考える県か」というところまで示せるところまで来ていると思うので、ここから先は思考 OS としての富山モデルをどう作り上げるかだと思う。
- ・ ウェルビーイング指標について、もともとは 1948 年の WHO の健康の定義から始まっていると思うが、これは身体的、精神的、社会的に良好な状態という趣旨で使われたのがベース。完全な肉体と心と社会的なウェルビーイング。その目的の軸がはっきりしてない限り、ウェルビーイングって言葉はやっぱふれやすい言葉。三軸をしっかりと活用しながら取組を進めると、富山のウェルビーイングに背骨が入る気がする。
- ・ フィジカル部分は、富山はもともと強い。自然な医療、食、水といった分野、ここは素晴らしい。メンタルについては、将来像を描けて、「ここにいていい」という感覚とか、いろんな新しい問いを持てる余白感。これは先ほどの藤野委員の「T-Startup」の話とも繋がっており、そこはドンピシャに繋がっている。ソーシャルの部分について、ソーシャル・ウェルビーイングが実は「幸せ人口 1000 万」の話とそのまま直結しているので、ある種人口論に翻訳したら幸せ人口 1000 万なのかと思う。この三軸をしっかりと入れることによって施策の整理が非常にできるんじゃないかなと思った。
- ・ 2 つ目は個別論だが、スタートアップとか GX の話について、私もかなり感銘を受けて素晴らしいなと思った。非常にいい軌道なので、富山らしい産業進化のランドスケープというか風景感を描くフェーズに移ると、一段とギアが上がるのではないかな。
- ・ 3 つ目は災害の話。最近ブログを書いたが、富山は災害がそもそも少ない。特に戦後の治水がすごく効いたおかげもあって少ないが、ある一定の確率では起きます。ディザスターが来た時に止まってしまうんじゃなくて、壊れていても再起動できるし、基本的に完全停止はしない「ディザスターレディー」な状態にするというのが結構重大。動作不能というか、何かの機能が止まって完全に止まる、ということはなるべくならないようにすると。例えば、電力供給であれば、突然グリッドから切れたとしても一定量は保てるとか、通信も水もそういう状態にするという話をちゃんと入れるのが実は重要。
- ・ 今の「国土強靱化」の流れを見ると、本来「ナショナル・レジリエンス」と言うべきと

ころ、強靱化はロバスト性に寄りがちで、レジリエンス側の議論が相対的に不足しやすい。これは全日本的にそうだが、富山は「ディザスターレディーの最先端モデル」というのができると非常にいいんじゃないかなと思う。

- ・最後に、富山は住んでいると全く忘れているかもしれないが、恐ろしく風光明媚な空間である、バックエンドが山脈で。だから本来は、「疎空間」の存続可能なモデルを作れる地域であるはずなのに、ちょっと都市型の政策が過剰ではないか。疎空間が生き延びるモデルを作るには非常に適したところだと思うので、何箇所かはしっかりと作り上げることが大事。疎空間は、基本ヘルスケアとか教育みたいなものは都市の力が必要だが、幸い富山はどこから行っても都市がそんなに遠くない。疎空間と都市連携が非常にしやすいという珍しい立地であり、そこもめちゃくちゃ有利なので、ぜひ世界的モデルを作っていただけると私としてはとても嬉しいし、実際に富山の三軸的なウェルビーイングを高めることになる。富山のどこをビジットする人も「あそこの谷も寄って帰ろう」とか、「あそこ私の谷だ」と思えるようなところがあるという、自然豊かな空間を育てられる運動論というか、流れができたらいいのではないかな。

【藻谷委員】

- ・総合計画における「高等教育機関の振興」に関連して、仮称「高志（こし）大学」の設立認可申請を今年の秋に実施予定。果たしてこれ、できるのかできないのか。教授が集まるか学生が集まるか。その前に文科省がうんと言うのか等の非常にいろんなハードルがあるが、県からも、そして県内の財界の皆さんからも非常に多大なるご支援をいただいている。本当に当事者としてびっくりするぐらいありがたく思っている。これから、認可が下りることを前提に発表するカリキュラムとは別に、若い人たちのウェルビーイングに資するようなこともしたいと考えている。なんとなく親から「この県には何も無い」みたいに吹き込まれてやる気を失っているような、アグレッシブじゃないような若者を引き受けて、楽しく「良かった」と思って生きていけるような人を増やせるように、なんとか大学を作って頑張りたい。

【前田副座長】

- ・まちづくり文脈では、おかげさまで「しあわせデザイン」を設立し、民間の出資が2社ほど入った。今年は、引き続きこの拠出金、出資を様々な活動を通じて集めていきたいと思っている。まずその出資を受け取る器ができたということは大きいと考えている
- ・富山の「ガストロノミーツーリズム」について、1,500万円の事業資金を100%賄える観光庁の補助金事業に採択された。県のブランディングとして「寿司と言えば、富山」を推進されているが、それを絡めた富山のガストロノミーツーリズムについて「しあわせデザイン」の活動として実施できたことが一つ大きな成果だったと考えている。
- ・もう一つ、いわゆる我々世代、40代のメンバーが、「ベッドアンドクラフト」とか内川

の街並みとか八尾とか、岩瀬は梶田さんが先陣切られましたけれども、様々な街を作ってきたこの10年間だと思うが、次の20代、30代の富山の未来を作っていくプレイヤーも育てようということで、「まちづくりコンテスト」を令和6年度から実施している。令和6年度は、応募が24団体、プロジェクトの立ち上げ支援は3団体。令和7年度のまちづくりコンテストは32団体の応募があり、新規で応募してくれる人が増えている。ちょっとずつ認知度を拡大しながら、Next100、次の20代、30代のプレイヤーを育てようという土壌が出来上がってきたかなと感じている。

- ・最後に、まちづくりの成功例の一つとして、昨年の11月に香川県の三豊（みとよ）市へ視察に行った。三豊では、毎年200人ぐらいの若い移住者を増やすことに成功しており、5,000人しか観光客がいなかったところを50万人に増やすことに成功してる。年に1回は、「しあわせデザイン」主催で他の地域の成功事例を見に行くツーリズムを引き続き実施したいと思っている。

【土肥委員】

- ・ウェルビーイング戦略プロジェクトチームにおいて、この一年議論してきたこともふまえて、ウェルビーイング戦略という点で感じているところは、やはり少なからず「ウェルビーイング」という言葉について、認識は個々の差があっても当然かと思うが、富山県がそこに舵を切ってるんだということや、自分の幸せって何だろうと考える機会が増え、認知度が上がっていることが顕著に数字に出ているのは、本当に良かったと思う。そもそもウェルビーイングを柱に掲げてなかったら、こんなに言葉が出ることもなかったかもしれない。
- ・子育て分野の視点で言うと、男性の育休制度を活用する人が増えた。私の周りや子育て世代のママたちからも「パパが育休とってくれてるんで」という声が、やっぱりこの1、2年すごく増えたなと感じている。ガラッと富山県の色が変わるわけではないが、育休を取りやすい雰囲気などは、ウェルビーイングが柱にあるからこそその結果だったのかなと感じている。
- ・期待しているところとして、子供たちの居場所の問題がある。不登校とかいじめの問題も最近またニュースで取り沙汰されているが、そういった分野に関しても、もっと子供たちの選択肢増加やケアしてくれる大人側の体制が整うスピードが上がってくるといい。昨年、富山駅前のCICに「こども総合サポートプラザ」という、子供に関する様々な課題を包括的にサポートしていく施設ができたが、そういったところで横串を刺して、いじめや不登校、フリースクールなども含めて様々な課題が解決されて選択肢が広がっていくことが、今年以降、数字で見えてわかるような変化が出てくることを期待する。ウェルビーイングは、どうしても見えにくいものだが、やはりマイナスの部分が良くなっていく部分は数字で見えるところもたくさんあると思うので、そういった変化が今後さらに広がってくると良い。

【前田副座長】

- ・令和6年度の成長戦略カンファレンス「しあわせる。富山」で、安宅委員や齋藤委員と一緒に登壇した際に「ヘルスケアバレー」の話が挙がった。配信もされていたので、県内外から「富山のヘルスケアバレーを創る」みたいな構想について、まだ夢みたいな話ではあるが、かなりの問い合わせや「どういうことをやるのか」、「何か協力できないか」というお声がけを本当にたくさんいただいている。富山県のいろんな企業さんからヘルスケアバレーに乗っかる形で何かできないかというご相談をたくさん受けている。
- ・齋藤委員とは具体的なスキーム図などを話しているが、やりたいと思いながら去年全く動けず、本当に反省している。今年はなんとか協議会を立ち上げて、その中で、ヘルスケアバレーはどういったものであるべきか、そこに向かってどういう政策が考えられるか。また、それによって医薬品に次ぐ富山の産業としてのヘルスケア産業という部分をしっかり勃興できるかどうか、特区的なものを作れるかどうかということを議論していきたい。

【齋藤委員】

- ・令和7年12月1日に、内閣府の事業において、地方創生をキーワードとして全国から5つの大学だけ事業に採択されたが、その一つに富山大学も採択された。採択されたテーマは、伝統医学を通じたヘルスケア産業の振興で、年間2億円ぐらいの支援を受けられる。富山大学は熊本大学と北里大学と連携し、それぞれの地域で伝統医学を用いたヘルスケア産業を振興しようということになっている。
- ・富山県はもともと製薬企業がたくさんあるが、創薬、新しい薬を作るのはちょっと荷が重い。一方で、ヘルスケアに関連した食品、もしくはヘルスケアの薬剤を作ることについては非常にノウハウがある。うまく産学連携をすれば、新しい産業というのも出来上がってくると思う。薬だけでなく、ヘルスケア産業についても非常に大きな伸びしろがあり、中部経済研究所に調べてもらったところ、これからの若い層を含めて、伝統医学関連について年間数パーセント以上の上昇率が見込める。国際的にも、世界中で80億人の方が使っており、グローバル戦略としても良いのではないかとされている。
- ・ぜひ、前田副座長ともう一度相談して、県や薬業界とも連携する形でヘルスケアバレー構想を立ち上げることができたら良いと考えている。

【藤野委員】

- ・スタートアップでも、このヘルスケアバレーは重要なテーマだと思っている。もちろん様々な領域のスタートアップを応援していくことは重要だが、「寿司といえば富山」がいい例であるように、わかりやすく強いところに特化することは重要。ヘルスケアバレーはもともとの産業構想からしても、富山の歴史からしても、富山大学であったり中核的

な支援組織があるということも考えてみると、非常に乗りやすいのではないかと思う。

- ・さらにこの文脈は、私たちが掲げているウェルビーイングにおいてもど真ん中。寿司のように、富山を広い面で見るとウェルビーイングにつながると言えるので、矛盾なく包摂的に力を結集できる。齋藤委員や前田副座長と協力していきたい。

【藻谷委員】

- ・新しいトレンドということで、関係人口ということをいち早く皆さんが何年も前におっしゃっていたわけだが、時代が後から追いついてきた。ウェルビーイングについて、富山がこうですよという話を東京に引き写してみると、東京はウェルビーイングがだんだん落ちている。東京に暮らしている一個人として、みんなのストレスが高まっているということを強く感じる。
- ・富山にずっといる人は、都会に比べて非常にウェルビーイングが低いから上げるんだとか、あるいはウェルビーイングが低いのに「高い高い」と言っていると感じられると思うが、逆に東京の人たちはもともとウェルビーイングなので、田舎と違ってほっときゃ市場経済でなんとかなると思っている人がすごく多いように思う。
- ・実際は家賃水準が非常に上がってきていて、かつ家を新しく買おうと思っていた場合、何年か前に比べて非常に値段が高くなっている。その分、結局どうするかという駅から遠いところに行かざるを得ないという状況。給料が上がっているといっても物価が上がっており、東京と富山の最低賃金はそんなに何割も変わらないので、家賃を考えると非常に東京の非正規労働者は暮らしが大変。
- ・というわけで、富山ですずっと同じように言っているが、東京側の状況変化で（富山のことを）「これはいいね」と思う富山県民以外の都会の住民は増えていると思う。ちなみに今の話は大阪でも同じ。すでに実施されていることではあるが、改めて「やっぱり富山いいよね」という都会側にいる人間を増やすのは、今年の大きなテーマだと思う。
- ・すでに昨年、大きな成果として富山が大分知られるようになってきて、おかげさまで内川も20年を経てようやくリアップされてきたし、利賀村のレストランとか、八尾とか、井波など、ようやく知ってる人は知ってるというところまできた。特に東京の有名人が口にするようなケースが増えてきたので、もっともっと今年はそういう富山の関係人口の皆さんに「富山すごくウェルビーイングで良いじゃない」ということを言ってもらって、それによってさらに県民の認識を、東京で耐え忍んでいる人よりはずっとまともな状況で、もっと良くなる余地が富山にはあるとわかってもらえると良い。東京はなかなか良くなる余地がないと言うか、外国人が東京の土地を買って、いい街なので売りに出さない。そういうところが富山をアピールするチャンス。富山がやっぱり一番ウェルビーイングじゃないの？みたいなブランドイメージが今できつつあると思うので、ぜひ皆さん頑張ってほしい。安宅委員が本を書いてくださったことも非常に大きかった。ありがとうございます。

【中村委員】

- ・ 寿司について、回転寿司もますの寿司も入っているが、一般的な方はなかなか握り寿司を食べに行くことが日常ではないと思う。スーパーでも寿司は売っている。そして、富山のスーパーの寿司はめっちゃ美味しい。私は出張で富山に来るときに必ずますの寿司は買って帰るが、スーパーでも寿司を買って帰る。富山県民の方も日常的にはそんな高い寿司ばかり食べれないってということもあるので、ぜひスーパーなど寿司のテイクアウトみたいなのところもブランディングの対象にして、ターゲット広げていく方がもっと広まるのではないかな。
- ・ ヘルスケアバレーの話は非常に素晴らしいと思う。まず、ウェルビーイング文脈でお話すると、先ほど安宅委員がおっしゃったフィジカル・メンタル・ソーシャルのところについて、フィジカルはだいたいどの年代層も高い傾向があるが、メンタル・ソーシャルのところでは若年層、就職する前の方々とか、中学生、高校生は非常にウェルビーイング指数が高い。そして、就職する段階からだんだん下がっていくという点が特徴的な傾向として出ている。これはやっぱり「行き先がないな」と感じているのではないかな。せっかく富山県は良いところなのに、あんまりいい働くところないな、という印象があるのではと思うが、ここと結びつけることができればいいと思う。
- ・ スタートアップ文脈でも申し上げると、関西大学のビジネスデータサイエンス学部というのが昨年できた。DXとかデータ分析に非常に学生の方も興味持っておられる。一年生で90人ぐらいの方に講義をしているが、そうするとその中からもう5人も起業している、1回生で。すごいなと思っている。起業っていろんなところに相談しに行ったりするが、毎日できない。そこに、日々の土壌として例えばヘルスケアの土壌があるとかデータベースの土壌があって、日々そういう環境に置かれているとなると、学生の方とか若い方も安心して取り組んでみようという気になっていく。先ほどの齋藤委員のお話にもあったように、例えば学生の中で、セミナーなどがあって「起業もできるよ、しかもヘルスケアバレーっていうのを富山でやっていて、ヘルスケアに関する起業は促進するし、いろんな土壌が作れるよ」という話をしてあげれば、富山の一番の課題である就職で出ていっちゃうというところの手前で、若い人にそういう仕組みがあるよとアピールしながら活躍の場を提供していくという非常に素晴らしい発想につながると感じた。

【齋藤委員】

- ・ 先ほど言い忘れたが、内閣府の事業に際して、富山県庁内に富山大学のランチを出していただくことになった。いろんな県民の方々、スタートアップ企業、製薬会社、それから学生も来ていただいて、そこで相談窓口を開設して、いろんな形でのアイデアを実現を目指したいと考えている。

【高木委員】

- ・まず、寿司について、まだまだ活動が足りないと思っていたが、地元のスーパーさんとも連携して、県民の日を寿司の日に変えるという取組みをしている。寿司の消費は、外食としてお店で食べるものと、弁当としての中食的なものと両方あって、両方とも富山結構スコアが上がってきている。外食・弁当で去年 11 月分までで今、金沢に数十円負けているが、結果は 2 月に出る。スーパーとかそういうものは地元の人々の生活において、頻度が高い接点なので、そこをもっと生かしていくのはやっていきたいなと改めて思った。
- ・先ほどのヘルスケアバレーに関して。富山県民の可処分所得が高いっていうのはすごい武器だと思っている。これだけ物価高の時代、ウェルビーイングを感じやすいと思う。雇用がちゃんと強くあることと関係あるのではないかな。今、政府が重点分野として決めている中の一つにヘルスケアが入っているはず。その中で、熊本はちょっと特殊だが、政府として、一定の産業クラスターで大規模雇用をちゃんと作り出して、共創性ある地域モデルを作っていくということを推進していくと思う。もっといち早く、県だけというよりは国も巻き込んで、ヘルスケアを富山でやっていくんだと。既存の製薬だけではなくて、もっと幅広い高付加価値のものを含めて富山のモデルをそこに集積させていこうということを、産官学、国を含めてやっていくべきかなと思う。
- ・寿司はわかりやすいので、キャッチーで認知度を上げたり広報的な観点はあるし、関係人口の創出の起点にはなり得ると思うが、やはり雇用はすごく重要。ヘルスケアバレーをガンとやっていくこの 1、2 年にしていくのはいいんじゃないかなと思っている。その辺をどうやったら一気にドライブしていくのか。具体的化していくのがパワーも必要で、大事なことだと思うので、道筋を見つけられるといいと思う。

【安宅委員】

- ・富山のウェルビーイングは、結局、フィジカル・メンタル・ソーシャル、WHO 的に言うところ「生き延びて、選べて、繋がれる」というのを、疎空間が多くて自然が多くてという場所で、関係人口もしっかり守るという条件下で同時に成立させようという設計思想なんだと思う。それは素晴らしい。では、幸せというか、人間がどうやって生きていくかという話を、たまたま昨日ゼミですごい議論していた。結局「やりたいことがあって仲間がいれば」楽しく生きていける。やりたいことがなくなって仲間がいなくなると不幸に陥るというのは、割とシンプルなこと。
- ・都市は問いを失っても生きられるが、疎空間では問いを持ち続けることがより重要になる。都市は「やりたいことをやる人」がいっぱいいいて、人を激しく使いたい人だらけの空間なので、問いを失っても都市では生きていける。でも、疎空間や谷みたいなどころだと、自分がやりたいことを失わずに問いを持ち続けることが重要になる。
- ・富山の本当の課題というか、解決できると素晴らしいのは「問いを失わずに生きられる

人」を社会としてどうやって育て続けて、みんなをそうさせるかが本当の要ではないか。これはヘルスケアの話も教育も全部同じ、人との絡みなので。教育の視点で人をデザインするというよりも「人が勝手に育っていくような余白」を社会としてどうやって用意するかという話のはず。読み書きそろばんみたいな話もあるが、富山の視点で見ると余白作りが結構重大なのではないかと思う。

- ・もう一点、風の谷の本にも出てくる「求心力の三つの軸」について。「絶景・絶生・絶快」と言っているが、都市に行ってしまう人なのか、都市に仕方なくいる人なのか。地元の土地で次々と新しい農業や新しい空間を作っていく人がどうしても一定量必要。そういう人たちを引き寄せようと思うと、普通の都会的な空間では得られない「絶景」が大事。
- ・もう一つ、安定して住める条件が整っていることが必要で、生活基盤としての空間がちゃんとあって、ヘルスケアとか教育がなんとなかなというのがウルトラ重要。実はこれがないために、ほとんどの人が疎空間を捨てている。そのため、富山の疎空間はこれが担保できるということが、実は重要性が高い。「絶生」に対するアテンションが実は足りないで、ここがとても重大だと思う。
- ・先ほど「やりたいこと」と「仲間」の話をしたが、結局価値を生む空間というのは、面白い人がいっぱいいて、混ざり合える場。我々の見解では、珊瑚礁的な空間をいかに作るかが結局のところ勝負。同じような人だけではダメで、いろんな人が混ざり合うと面白いことが起きていく。このような空間づくりをどんどん広められるかどうか、本当の長期的な未来がかかっている。富山がウェルビーイングを突き詰めると、この「珊瑚礁的な空間づくり」というのが極めてクリティカルになるはずであろうと思う。
- ・最後はヘルスケアバレーについて。大事なことは、一つは「なるべく病気にならずに楽しく生きていられる」という部分。もう一つは、いざという緊急事態の時に死なないこと。命に係わる急性期疾患が起きた時は、一定時間内に高度医療へ接続できる体制が必要。前者については、三つ大きなポイントがあって、一つは歯が健康であること、二つ目は足腰がしっかり歩けること、三つ目が一人にならない、友達がいること。孤独があらゆる病気を激増させるというのはデータ上、明らか。「歯・足・混ざる」を徹底できると、実はフィジカルの部分はメンタルも含めて良くなるはず。
- ・緊急事態等のクリティカルティ対応に関して、疎空間について言うと、一定時間内に高度医療へ接続する手段は実質的にはドクターヘリ以外ほとんどないはず。疎空間では、土地がいっぱいあるので、ヘリコプターが降りられる場所をいっぱい作っておくことが結構重要。ドクターヘリが今、富山に何台あるのか正確に把握していないが、もし1台あったら2台か3台ぐらいまで増やしても、ドクターヘリの維持費が医者込みでペイする可能性がある。費用対効果の検証は必要だが、ヘリポートとドクターヘリを強化すると実は劇的に良くなるのではないかな。

【朝比奈委員】

- ・ 県庁オープン化の観点から一点だけ。今の安宅委員の珊瑚礁の話もそうですし、他の方のウェルビーイングの話ともつながるが、この「幸せ人口 1000 万」という関係人口を目指していく上で、実際に面白い人たちがたくさんいるよとか、ウェルビーイングを体現している人たちの「具体的な人の見える化」が結構大事な気がしている。
- ・ どういうところに関係人口が来るかという、もちろん安宅委員がおっしゃったような前提になるわけだが、やっぱり「面白い人たちがいるので行ってみよう、話を聞いてみよう」という部分が非常に大きいと考えている。面白い人に惹かれて、別のクリエイティブ人材が集まってきて、裾野が広がっていくという流れだと思う。これはそんなに行政コストもかからないと思うので、実際に富山で活躍されている、あるいは楽しく生活されているウェルビーイングな人たちのモデルみたいなものが色々見える化されてきて、そこに惹かれていって、という流れができると良い。
- ・ 今回の成長戦略カンファレンス「しあわせる。富山」もいい機会だと思うが、そういう人たちがまたどんどん触れ合って、惹かれて、関係人口化していくというスパイラルを次の総合計画の実装期間で可能にするように、ロールモデルの見える化・伝達といったところに対して、県庁の政策として重視されるといいのではと思う。

【土肥委員】

- ・ 突飛な意見になってしまうかもしれないが、安宅委員の話を聞きながら、歯がやっぱり健康じゃないと、という話を思い出した。私は医者ではないので詳細は承知していないが、ここ数年で子供の歯並びの問題がすごく問題視されている。小児歯科の先生とお話する機会が多いが、今は虫歯で歯医者にくる子はほとんどいなくて、ほとんどのお子さんが歯並びで悩んで歯医者に来る。歯科矯正も非常にお金がかかるので、矯正する家もあればできないという家もある。そもそも未然に防ぐための食生活から紐付いているという話なので、病気にならないということをお子たちに関して考えると、子供の歯の問題も給食や保育園のおやつ、離乳食などいろんな分野と連動して、遺伝的なものではなく、食生活で口周りの筋肉が育たないから歯並びが悪くなる、という話を聞いたことがある。
- ・ 子供の教育環境と歯並びは何かしら関係はあるのではという点について、医者だけでも家庭だけでも何とかできる問題ではないが、「歯並びで悩んでる」という声は本当にこの数年増えたなという実感がある。

【藤井副座長】

- ・ 今の子供の歯並びの話や、いじめ、居場所の話など、土肥委員のお話は、いつも地に足がついていて、普通の人の普通の悩みの話が多い。それは、安宅委員が先ほど挙げられた三軸のウェルビーイングの観点からは、見過ごしがちなものすごく重要な点ではない

か。「普通の人が普通の生活でどこを苦しく感じているか」という点。

- ・冬休み前後で事務局の方々と「こういう視点も今後重要ではないか」という雑談をしていた中で、正面から取り上げられないと言われてしまったが。あえて言うと、なんとなく「成長戦略会議」という名前に引きずられて、この会議がすごく意識高い系で、ハイブラウで、なおかつトリクルダウン（富める者が富めば貧しい者にも滴り落ちる）が前提になっているような話が多いんじゃないかという違和感を時々感じる。
- ・土肥委員みたいに地の足のついた方の話を聞くと、「面白い人が集まって素晴らしい仕事があつて」という理由で富山に関わりたいという人って本当に多分少なく、もう生きていくのが精一杯、という「子供食堂」の話とかのほうが生近に感じる人のほうが多いんじゃないのか、と感じる。
- ・事務局から「県内外の情勢」という問いがあつたが、選挙でも「手取り増加」がキーワードになった。手取り増加は結局、税と社会保障の話になってしまい「それは国の話だから県でする話じゃないよね」という整理であつたが、それでも社会福祉政策や教育政策というのはバリバリ自治体の話。そこの、ものすごい意識高い系の人じゃない、普通に生きている、もしくは生活が苦しい人たちのための教育政策や福祉政策という部分に、ものすごく光が当たってないというか、この会議においてアンバランスになっている気がする。ここは成長戦略会議だから、あくまでも上げ潮派的な成長戦略の話をしてくださいというならいいが、「幸せ人口 1000 万」と言ってウェルビーイングに舵を切らんだったら、本当にそんなにハイブラウな意識高い系の話ばかりしていいんだろうか、と感じている。
- ・もう一つ、これもこの場ではなく、他の場で議論することになるとは思うが、近年のトレンドとして「ジャパンファースト」とか「外国人が多すぎる」という話がある。関係人口という意味では「イケてる外国人を富山にいっぱい集めよう」という話をしてたけど、実際に富山にいらっしゃる外国人の方はエッセンシャルワーカーの方もいっぱいいらっしゃるわけだし、ツーリズムで来るお金持ちじゃない外国人も増えると思われる。そういった「共生社会」と本当のウェルビーイングについて、イケてる外国人だけ選んでこようということでもいいのかな、という違和感はあつた。この場合は「成長戦略会議」なのでそういう話はしないんだろうなと思うが。

【藤野委員】

- ・藤井副座長のコメントはすごく共感するところがある。確かにハイブラウの人たちの話が多い。そもそも成長戦略会議に出てきているこのメンバーが、割とテンションが高くてやる気に満ちていてというような人たちが多いから、やっぱりそっち方向に向いてしまう。
- ・でもやはり藤井副座長の視点はすごく大事。土肥委員がお話いただいたような幸せ感は、意識して気をつけなければいけないことかなと、自分自身が思っているので、その

違和感を共有していただいたのは嬉しいこと。目線を高く持って引っ張っていくところはリーダーには重要なんだけど、一方で、そんなにテンションも高くなく、やる気に満ち溢れているというようなエネルギー量ではないんだけど、市井にささやかに生きている人たちに対するウェルビーイングという目線は必要なのかなと思う。

【安宅委員】

- ・藤井副座長のおっしゃる通りで、ウェルビーイングの話は平均で議論することはあんまり意味がないというのを何度かこの会議で発言した。本当に重要なのは、平均値を上げることより、ウェルビーイングが著しく低い状態に置かれる人を減らすこと。ほとんどの人の大半のところにはちゃんと目を向けなければ意味がない、ということについて心から賛同するところ。
- ・では、どういう人がウェルビーイング値が下がるのかということをちゃんと理解するのが重要。一つは孤独。孤独はタバコやお酒以上に影響する。孤独を感じる人は基本、若い人か年を取った方。年を取った方は、仕事をやめる、家族や連れ合いに先立たれる、子供は独立する、あるいは体が動かなくなる、という理由でほぼ説明できる。そういう方々をどう支えるのかという話もある。
- ・一方で、不登校の子どもたちが30万人もあり、富山だと数千人いるはず。その方々の居場所をどう作るかというのは、実は子どもにおける（「風の谷」をつくるために必要な）珊瑚礁化みたいな話。成功している人は放っておけばいいので、そうじゃない方々がハッピー軌道に乗るようにする。「ここはどんな人だって居場所があるんです」というところがちゃんとできると、本当にウェルビーイングな県になるのではないかな。意識が高い人しか住めなくなった瞬間に、それはもうウェルビーイングな空間ではない。心から今の議論に賛同する。

【藤井副座長】

- ・高齢者と子供の話が出たが、令和6年度の成長戦略カンファレンス「しあわせ。富山」で、高校生や大学生の方々も議論に参加された。その中で、高校生の方が「居場所がない」と。放課後にたむろする場所がない。富山市内から毎日2時間かけて、氷見の「第三の居場所」みたいな施設に通っていると。そういう場所をもっと作ってほしいという意見があった。「第三の居場所プロジェクト」というのは日本財団などが頑張って、勉強する塾でもなく管理される場所でもない、学童ともまた違い、最近は中高生たちが自由に街の中を走り回れる環境ではないので、オンラインじゃないリアルな居場所を作ろうという運動がある。こういった話を、この会議の場で正面から取り上げていないので、本当に普通の人たちの幸せを考えたいと思う。

【藻谷委員】

- ・今の話題に感銘を受けた。こういう場でこういう話が出ることで自体が「日本すげえな」と思う。「差があることが活力だ」と思い込んでる非常に多くの人たちがいるが、そうじゃなくてボトムを上げること。上はどんどん天井知らずで行けばいいので、それとは別にボトムが上がることでこそが本質だというのは、本当にその通り。
- ・やはり目指すはスイスではないか。エッセンシャルワーカーに対して、「人生失敗したからあんな仕事してるんだよ」と言う社会ではなく、スイスのようにエッセンシャルワーカーの方が、私より給料が高かったりする、そういう社会を目指すべき。その上で、稼いでいる人はもっとウェルビーイングを高めていけばいい。
- ・「誰かが不幸になっているために誰かが幸福になるんだ」という考えを幸福総量決定説と言うが、「誰か不幸なやつを作らないと私は幸せになれない」という日本に染みついた思い込みを直さなきゃいけない
- ・今の日本は結局、エッセンシャルワーカーがいないと私たちは全然生きていけない。店もやっていない、輸送してもらえない、生きていけないのにエッセンシャルワーカーを馬鹿にしている、その人たちの所得が生活できないレベルに低くなっているというのは、江戸時代の武士が農民をバカにしてると根底的に同じ。例えば、明日から急に校長先生をおやめになって用務員になる等に対して、尊敬されるよね、という社会がまだあると思う。お互い支えあって「他人のエッセンシャルになることってすごくいいことだよ」という評価基準が持てる富山を作ると、世界の先駆けとしてモデルになれる。富山大学、まさに伸びる人をどんどん伸ばすというすごく良い大学。そこからこぼれ落ちるような、対極の世界は何とかなしたいと思っている。

【高木委員】

- ・今の議論は賛成だが、多くの人を支援していくのは政治・政府の仕事として必要であることは大前提として、富山県庁の皆さんも実施していることだと思う。ウェルビーイング調査などを起点に見つけていければいいなと思う。
- ・一方で、私は富山県の価値を上げることとみんなを幸せにしていくことは、同時に成立するものもあるような気がしている。企業というと難しい部分もあるのかもしれないが。寿司も、普通の生活をしている人たちが享受して「それがいいな」となっている。
- ・共有させてもらおうと、「しあわせ。富山」では、立山連峰のビジュアルをずっと作ってきて、ずっと立山連峰推し。今回、私の会社で、カターレ富山のユニフォームをデザインさせてもらって、それも立山連峰にしている。立山連峰の恵みは、富山に住んでいる人はある意味享受できる豊かさ。その誇りがあれば、地域に対してすごく誇りを持つし、豊かさを感じるようになる。それは、税金で何かをすることよりも、もっと気づいてみんなで大事にできるようなものではないか。そういうシビックプライドある地域は強いと思うし、どうやったらもっとこの恵みを感じられるか、そういうことを考えられるんじゃないかなと思う。

- ・ 貧困対策とかを行政としてやるのも大事だけれども、せっかくこの富山県っていう一つの特異な地形、自然環境、文化の中にある豊かさをどうやってみんなで共有できるか、というアプローチはもっと考えられる。私のアプローチはどうしても表現なんで、そのイメージを作ったり共有していくということになるが、そういうことももっと考えていけるといいと思う。

【安宅委員】

- ・ 面白いものが始まるころは、だいたいワイガヤ的で謎めいた空間。表に出てきた人を可視化することはぜひやったほうがいいと思うが、目的や属性が固定されすぎない、余白のあるワイガヤ的な空間をいっぱい作ることがとにかく重要。こういうところがいっぱいあると、今の東京の新大久保みたいに面白くなる。下手に激しく開発したところではこういうものは全く起きない。
- ・ 謎めいた人たちがいる場所をいっぱい作る。ここに学校に居場所がない子供でもいいし、仕事場つまんないって人でもいいし、色々仕掛けられるような空間がいっぱいできていくと、めちゃくちゃいいなと思う。そういう意味で藻谷委員がおっしゃった底上げのようできて、実はこれこそが本質であって、そこから面白い未来が生まれてくるということではないか。

【中尾座長】

- ・ 先月、氷見のご婦人の会に参加したところ、私の肩書は「ウェルビーイングの中尾さん」となっていた。（「ウェルビーイング」の認知度が）51%と出ているが、実際の認知度はもっと高いのかもしれない。今日はご熱心な討議ありがとうございました。

【新田知事】

- ・ 2020 年の 11 月に知事に就任し、その 3 カ月後の 2021 年 2 月に、私の選挙公約であった「ワクワクするような未来の富山県をみんなで語ろう」をめざして、この富山県成長戦略会議を立ち上げた。ちょうど一年間、議論を重ねて、2022 年 2 月に富山県成長戦略およびアクションプランを世に送り出した。
- ・ それから三年あまりにわたり、成長戦略に沿って、ともすればハイブラウだったのかもしれないが、突き抜けた政策を打ってきたところ。
- ・ 従前の総合計画がすでにあったので、我々が作った成長戦略は総合計画の補完的な意味合いという整理で取組みを進めてきたが、昨年 12 月に新しい総合計画を策定した。その基本理念は、まさにこの成長戦略のビジョンである「幸せ人口 1000 万～ウェルビーイング先進地域、富山～」を継承している。
- ・ 朝比奈委員からは「体制固めができてきた」というご評価もいただいたが、基盤がしっかりしてきたのかもしれない。一方、体制が固まったからといって決して守りに入るつ

もりはないので、引き続きワクワクするような富山県を目指してやっていきたい。

- ・今日は、この富山県成長戦略会議の名称を「幸せ人口 1000 万実現会議」にさせていただきたいという提案をさせていただいた。まさにその名称変更と期を一にするように、安宅委員から、1948 年の WHO のウェルビーイングの定義にも立ち返ったお話をいただいた。それが伏線となって、終盤、土肥委員、藤井副座長、藻谷委員のご意見につながり、まさにこの「幸せ人口 1000 万実現会議」の今後の方向性を位置づけるような議論になったことをとても嬉しく思っている。
- ・今日も大変多くのヒントをいただいた。いつも私は「突き抜ける」と言ってきたが、淡々とした中にもとても素晴らしい議論が展開されたと思う。皆さんにお礼を申し上げまして、最後のリマークとさせていただく。ありがとうございました。